

須佐神社

この神社は、古い伝説においてスサノオノミコトがその身体を捨て、永遠に自然と一体となることを決めたとされる場所にあります。スサノオの魂は、神社のある谷全体に宿っていると信じられています。有名な出雲大社でもスサノオは祀られていますが、知名度では劣るこの須佐神社こそが彼が本当に住む神社であると長い間考えられてきました。

神話によれば、スサノオは頭が8つある蛇の妖怪ヤマタノオロチを倒し、その尻尾の中に奇跡の剣を発見したとされます。スサノオはイナダヒメを妻と迎え、宮殿を建てる場所を探し始めました。この谷にたどり着いたスサノオは、ヒメに「この土地は私の心を安らかにし、鋭気を与えてくれる。この地に私の名前をつけて、ここに住もう」と言いました。

神社の所在地

史料によると、須佐神社は近くの丘の斜面にあった元の場所から現在の場所に移され、何世紀にもわたって何度も再建・改築されてきました。この神社は、神社の横を流れ、敷地の境界線ともなる須佐川に平行して配置されています。この川には、かつて高官の使用を目的とした黒塗りの特殊な儀式用の橋が架けられていました。境内には、神の家とされる本殿のほか、小さな社殿などがいくつかあります。本殿の向かいのすぐ近くには、スサノオの姉である天照大御神が祀られています。

神社への入り口

須佐神社への参拝者は、まず随神門をくぐります。これは屋根付きの小さな木造の門で、屋根の下には金色やその他の明るい色が塗られた一対の狛犬が周囲に目を光らせています。随神門をくぐり、左右の小社殿の間を通ると、本殿の前にある閉じた礼拝堂である拝殿に到着します。祈祷と供物はここで行われるのが通例です。この様式で建てられた多くの神社と同様に、この神社にも長い屋根付きの階段があり、拝殿から本殿へと続いています。この階段を昇れるのは神主のみです。それ以外の人々が本殿を見るために横に回る必要があります。

神社の敷地は雑木林に覆われており、本殿の左右の細い通路があるだけなので、最初に高さ12メートルの建物を見ると圧巻です。参拝者は、この狭い空間で本殿を全て視界に収めるためには、首を大きく上げなければなりません。そのことで視覚的なインパクトはより大きなものとなります。1500年代には、同様の設計で倍の高さがあった本殿が建てられました。現在の本殿は19世紀のもので、

大社造様式

本殿は、大社造と呼ばれる、高い木製の柱で高床式になった様式で建てられています。これは出雲大社を原型としたもので、塗料の塗られていない杉材が用いられています。屋根も杉板で覆われており、棟には神社によく見られる鯉木と千木が装飾的に配されています。鯉木は先細りの円柱を水平に敷き詰めたもので、後者は棟梁の端からV字型に立ち上がった木の部材を交差させたものです。本殿は美しい杉板の柵で囲まれており、両側に小さな門がありますが、参拝者は立ち入ることができません。神道の信仰によると、私たちの醜さや不完全さを目撃して神々が驚かないように、内部は人の目に触れないようになっているとのこと。

本殿の裏側には、大杉さんと呼ばれる杉の巨木があります。直径は2メートルを超え、高さは30メートルを超えます。この地域で最も高い杉の木となっています。歴史の記録によると、樹齢は1300年を超え、古代から生き続けるものとして畏敬の念を集めています。節くれだった根は蛇のように地面を横切り、多くの参拝者は根に触って木の魂に捧げ物をします。

須佐神社の七不思議

須佐神社は「七不思議」の伝説で知られています。不思議の一つには塩水が出る塩ノ井という井戸があり、不思議なことに遠くの海とつながっていると信じられていました。そのほかにも「影無桜」と呼ばれる影のない桜や、男性と女性を示す「相生の松」と呼ばれる松などがあります。穴の開いた榎の落ち葉は、イナダヒメが出産した後に胎盤を榎の木で包み、松の葉で結んだところから、榎の木と松の木が生えたというもう一つの不思議を思い起こさせます。近くの田んぼには、雨壺という、石にできた穴に草が生えているところがあります。これを乱雑に扱うと洪水を引き起こすと言われていました。神社には「神馬」と呼ばれる馬が飼われており、白くなることで災いを予知すると言われていました。最後の不思議は、須佐川を挟んだ反対の山腹の岩肌によく見られる「星滑」（ほしなめら）という、山の斜面のむき出しになっている岩肌に頻りに白い点が現れる現象です。白い点がいくつ見えるかで、次の収穫がどのようなものかが分かると信じられていました。